

平和人権教育研究部会

I 研究テーマ

「平和・人権・国際連帯・環境教育の教材発掘と研究」

II 研究テーマ設定の理由

甲教協「平和と人権部会」では、甲府空襲の資料収集と教材化、そして「もうひとつのたなばた」等を用いた授業実践を継続して行ってきました。戦争は68年も前の出来事であり、部員の誰一人経験したことではありません。しかし、ヴァイツゼッカーが「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となる」と言うように、被害だけでなく加害の事実もしっかりと心に刻むことなしに現在や未来の平和や友好を築くことはできず、それは大きく教育の使命、責任だといえます。平和教育を志す者は、先人に学び、手探りで教材を見つけ、作成し、授業を行ってきました。それは、過去にこの地に起きた出来事を現在のこの地に結びつけると同時に、現在この地以外で起こっている出来事をこの地に結びつける作業であるといえます。さらには、教員自身が、それに対してどう考えどう行動しているのかを問われ自問しなければならぬ作業でもあります。そのことに向かい合い悩むことが、部員として部会としてもう一步平和教育を推進していくことになると考えます。

Think globally act locally といわれるようになって久しいが、最近では、Think locally act globally ともいわれています。まさに、過去や遠方の出来事を自分のこととしてとらえて共感でき、連帯して行動していく力を育てていくことが求められているといえます。それには、幅広い知識を教えるだけでなく、深く心に訴えかける授業実践を行っていく必要があると考えています。

III 研究の経過と内容

1 経過

- 4月11日(木) 研究テーマ・研究内容・組織等の決定
- 5月14日(火) 今年度の研究について
- 6月18日(火) 研究計画の確認及び実践報告会
- 7月31日(水) 臨地研修 南アルプス市「ロタコ(御勅使河原飛行場跡)」
- 8月16日(金) 「原子爆弾投下」に対する新事実を学ぶ
- 9月 3日(火) 県教研レポートについて①
- 10月 1日(火) 県教研レポートについて②
- 11月 5日(火) 県教研還流報告
- 1月21日(火) 今年度のまとめと来年度の方向性について

2 内容

「甲府空襲」をプラネタリウム番組に

(1) 科学館主催：読み聞かせ「もう一つのたなばた」

本校の同僚は、以前山梨県立科学館（以下、科学館）に勤務していたことがある。彼が科学館勤務時代に同僚だった天文担当のKさんに、先に述べた2010年の授業について話をしてくれたところ、とても興味を示してくれた。その後、当時の書記長に連絡を取り合ってもらい、2011年7月7日に、甲府空襲展、甲府の平和を考える集いにあわせて、科学館のプラネタリウムを利用しての催しを行った。内容は、退女教の先生方による紙芝居「もうひとつのたなばた」の読み聞かせを、プラネタリウムとのコラボで行うという特別公演として催された。Kさんの方でプラネタリウム担当を行い、退女教の先生方による「もうひとつのたなばた」の読み聞かせを行う。まず、プラネタリウムで一般的な七夕の解説を行い、そのあと、1945年7月6日の夜空を投影。（科学館のプラネタリウムは、未来や過去のいつの星空でも再現できる機能を持つ。）そして、続いて紙芝居の投影。例年体育館などで行うときには、大型紙芝居が使われる。しかし今回はその紙芝居をデジタル化し、プラネタリウムの夜空が投影された。語りは退女教の先生方である。話の合間合間には、当時の甲府の町並み、B29等の写真や映像、そしてエンジン音、空襲時の爆撃音などが入れられた。そして夜空を赤くして、甲府の町が燃えている様子も再現された。参加者の感想は非常によいものだったそうだ。その後第2回目として、翌2012年8月15日に同じように科学館の催しとして行われた。

(2)「甲府空襲」をプラネタリウム番組へ

この後、本校同僚とKさんとの間で、甲府空襲をプラネタリウムの番組にしたらどうかという話が出た。一度打ち合わせを・・・ということで、今年9月22日、閉館後の科学館にて待ち合わせをし、Kさんともうお一方、科学館の職員の方と本校同僚、そして私の4人で話をした。科学館側としては、甲府空襲の話はプラネタリウム番組に、という話は基本的には賛同できるということだった。ただ、なぜプラネタリウムでなければならないのか、という必然性についてはどうかのご指摘も受けた。たしかに、甲府空襲自体は天文とはほとんど関連がない。空襲を受けたのが七夕という星のお祭りの前日ということだが、それだけといえばそれだけのことである。「甲府空襲を大勢の方々に知ってもらうことの趣旨はわかるが、プラネタリウムでなければならないという必然性としては、少し弱い」という事である。たしかに言われればそうである。私は少し考え込んでしまった。ここで上演する必然性とは・・・

(3) 当日の夜空の再現（プラネタリウムがもつ力①）

話し合いの後、実際にプラネタリウムに入り、どのようなものをどのように上映できるのかを説明してもらった。場内を暗くした後、満点の夜空が映し出された。打ち合わせの日。2013年9月22日の星空である。織姫星、彦星、そしてその間に流れる天の川・・・本当に美しい夜空を映し出している。そしてKさんは、「では甲府空襲の当日、その時間、1945年7月6日11時45分頃の星空を映しましょう。」と、まさに空襲の日、空襲のあった時間の星空を再現してくれた。一瞬にして自分が、その日、その時間の甲府にタイムスリップしたような感覚を感じた。（当日は全天の7割が雲に覆われていたとの事だが、雲の合間合間にはきっとこの星空が見えたと思われる。そして雲の上にはこの星空が広がっていたのである。）私たち3人以外誰もいないプラネタリウム。静まりかえった館内は、空襲前の穏やかな甲府の街そのものに思えた。空襲前、7月6日深夜の甲府にいる。そんな感覚とともに、これから、あの地獄のような空襲が始まるのだ・・・。130機以上のB29がこの空を飛来し、多くの爆弾が降り注ぐ中、たくさんの人が逃げ惑い、町は焦土になり、多くの人々、子どもたちがなくなっていく・・・。今から、この空の下で・・・そう思うと、急に涙がこぼれてきた。予想もなかった感覚と感情に驚いた。その後、空襲がほぼ終わった頃の星空、夜が明け始める頃の星空と続けて映して頂いた。東の空には、火星、金星、三日月が、一直線に並んで昇っていた。焦土の中で輝く3つの星。西には沈んでいく織姫星と彦星が見えた。

(4) 暗く閉じた空間と映像・音響効果 (プラネタリウムがもつ力②)

そして続く「もうひとつのたなばた」のスライドと甲府の町並み、B29 やその爆撃の映像・・・・。「こうすれば、甲府の町が燃えているようになります。」とKさん。愛宕山から見える甲府の夜景。そこに赤い光をかぶせると、赤々と燃えている夜空が浮かび上がる。「動画や音声を入れると、もっと真に迫りますね。」その通りだと思った。明るい体育館と違い、真っ暗な中で映し出される「もうひとつのたなばた」のスライドには、ぐっと引き込まれるだろう。そして物語の進行に合わせて映し出される、空襲前の甲府の町並みの写真、B 29 の写真、爆撃中のスライド。それに合わせた爆音の音声、空襲の動画等々。きっと見ている人たちは、その恐ろしさを肌で体感できると思った。戦争や空襲を実際に体験していない私たちが、その恐ろしさ、理不尽さ、残酷さ、悲惨さ・・・を伝える一つの大きなツールになり得ると思った。

(5) プラネタリウムで行うもう一つの重要な意義

プラネタリウムという空間が作り出すことができる、二つの再現力。一つは当日と同じ夜空を再現し、その日その時間その場所を再現できること。もう一つは、観覧者を見ている世界に引き込むことのできる、閉じた空間と映像・音響効果による再現力である。甲府空襲と私たちを隔てる68年という時間。その時間的な距離を近づけてくれる、非常に有効なツールとなり得るのがプラネタリウムだと実感した。プラネタリウムで甲府空襲を扱う意義。それは今述べてきたような再現力を最大限活用できるということ。そしてもう一つ、重要なキーワードはやはり「七夕」だと思う。七夕は、星空に未来への夢と希望を願う行事である。七夕には子どもたちや人々が、星空の織り姫星や彦星に夢や願いを描く。それは未来への希望である。しかし、1945年七夕の前日、甲府空襲の夜の空は、未来への希望をすべて奪う空になってしまった。夢や願いをかける七夕の日の前夜、その夢や希望が込められた同じ空に、130機以上のB29 がやってきて、夢や希望、そして命を奪う爆弾を落としていった。

夢や希望を願う星空が恐怖の星空へ・・・。ツールとしてのプラネタリウム利用と共に、「星空」から「平和」を考えるとということが、プラネタリウムで行うもう一つの重要な意義ではないだろうか。奇しくも甲府空襲の日、最初に来たB 29 が投下した照明弾は、科学館の真上に落とされた。山梨県立科学館で甲府空襲を扱う意義がそこにもあるように思える。

(6) 今後

もしも科学館の中で企画が通り、順調に話が進めば、最短で来年度に制作に入り、再来年の夏には上映できるようになるそうである。(仮の話だが) もしそのような形になったとすれば、今後は、二、三の教員が個人として単独で関わっていく・・・、ということではなく甲府市教育協議会の平和人権教育部会が組織として関わっていく事が大切であると考えて。「市の公的な研究組織が、平和教育のプラネタリウム番組を、科学館とともに作り上げた」という形をとることは、非常に重要だと思う。市として取り組んでいるという事実を作ること。始めは形だけでも、その流れをつくっていく(南アルプス市のロタコのように)、伏線を引いていくという意味。市・学校と科学館とのいわゆる博学連携のもとに、ともに平和教育の題材をつくるという事実を大切にしていければと思う。しかし、プラネタリウムの番組制作には、莫大な費用がかかる。どんな形で話が進むのか、そもそも企画が通るのかは予想できない。来年の県教研には、良い方向で話が進んでいるという報告ができることを願っている。

IV 研究の反省と課題

本研究会では、今年度、2本のレポートを県教育研究集会で発表し、自分たちの研究について各支部から多くの意見をいただくことができた。来年度も、現在の研究を進め、成果を上げられるようにしていきたい。